

## 片腎で 90 歳！！

2012 年 2 月、母の誕生日。

大正 11 年生まれの母が、無事 90 歳になった。

90 歳になる母など、想像もしていなかった。

父より長く生きるなんて、思ってもいなかった。

20 代で片腎になった母は、ずーっと身体が弱かった。

私は長生きなんて出来ないの、とずーっと言っていた。

母のお母さん、つまり私にとって祖母にあたる人は、30 代で亡くなった。

男の子 1 人と 4 人の娘を残して。

親はね、生きていだけで有難いのよ、私はこれからどれくらい生きて、

貴女たちを見守ってられるかしら、母のコトバは重かった。

父が 93 歳で亡くなる少し前、肺炎で入院した夫への妻からの伝言は、

「100 歳まで生きてね。私は 90 歳まで頑張るから」

二人は 9 歳違いなので、その時の母は 84 歳だった。

長生きの家系の父なら、この肺炎を乗り越えられれば 100 歳まで生きられるかもしれないと、周りは思っていた。

ベッドで父が「そりゃ無理だろう。」と苦笑いしたのは、自分が 100 歳まで生きてね、と言われたインパクトより、妻が 90 歳まで頑張って生きる、と言ったことに驚いたに違いない。

なにしろ敵は結核で片方の腎臓を摘出して以来、約 65 年間も「私は長生き出来ない。早死にする！」と言いつけてきたのだ。

90 歳までとは、なんと前向きな事、と家族も結構笑った。

そして、宣言通り、90 歳の誕生日だ。

いつでも横になれるようにと、寝床は 65 年間、常に部屋に用意されていた。布団・マットレス・ベッド、道具は変われど主は一人、65 年床だ。

家に居る間中、コホコホと空咳をし、食欲が無い、頭が痛い、咽喉が腫れて 2 か月も治らない、心臓も悪い、微熱が下がらない、朝は起きられないなどなど、体調不良を訴え続けるのが日常だ。※ひとたび出かける段には、別人の如く快調となるのだが。

不思議な事に、頭が働かなくなり始めてから、母は徐々に日常生活の不調を訴えなくなった。

主治医の検診で、にっこり笑って「ええ。特に体に悪いところはありません。お腹を壊したこともないんです」と答えている。

ええっつ！健康を自慢している？貴女は何時から健康体のひとに変身したのでしょうか？！

あわてて、「足が弱って段差で転んだりします。薬は時間の感覚がないので定時に飲むことができません。嚥下障害も進んで、ヨーグルト状のものしか飲み込めません・・・」  
と口を挟む。

コホコホと空咳をしなくなった母が 90 歳になった。

昨年秋から入所した施設の雰囲気馴染んで、ゆったりと過ごしている。

少し前の記憶は殆ど吹っ飛んでいるすっぴんの婆さまは、化粧をするのも忘れてしまったようだ。家族以外の人前で、「口紅もつけずに」（注；母の口癖のひとつ）いる姿は、亡くなった父には想像がつかないだろう。

おめでとう！90 歳なんて、もの凄いね！と言うと、首をかしげて「しまった！」とでもいうような照れた笑顔が返ってきた。